

2018年S Semester

Campus Asia 北京大学交換留学 レポート

東京大学法学部政治コース3年

高佐綾菜

構成

- 1 はじめに
- 2 本文
- 3 終わりに

1 はじめに

留学期間中に、大学の後輩から、ゼミのレポートを書くためのものであると推測される、以下のような文章が送られて来た。

中国の現統治体制では、個人の権利保障や、権力分立が未成熟であるのに対して、民族的統一性（13億人の国を維持すること）、経済成長に伴う豊かさを担っていくという高揚感、強い中国の実現に向けた高揚感などがあると伺ったのですが、これ以外に現中国の統治体制だから得られる便益に関して、何かご存知だったりしていますか？ まだテーマを定めかねているのですが、中国共産党の統治の正当性あたりを調べようとしています。

この文章を留学先で読んだ時に、文章の隅々にいろんな違和感を覚えた。言葉の使い方や、描写に、自分が留学中に実感する感覚とは異なる、「中国」というものに対する固定概念や決めつけ、誤解が、この文章の書き手の中に存在するように感じた。

おそらく、この文章に感じる私の違和感は、日本から見た中国像の歪みを象徴しているのだと考えた。

そのため、今回のレポートでは、この文章をもとに、日本にいた時から認識が変わった事柄や、留学期間中に得た新たな気づきについて書いていくことにした。

2 本文

「中国の現統治体制では、個人の権利保障や、権力分立が未成熟であるのに対して、」
まず、「権利」が何を指すか、また「保障」がされた状態とはどのようなものと定義するかにより、「個人の権利保障」がなされているかの判定は分かれる。

政治へ考えが反映されるという権利が保障されているかを、投票や制度による形式面が整っているかで測るならば、中国での権利保障は他の民主主義国より劣っていることになる。だが、中国は自らを「民主主義」国と評しており、「民意反映」にはかなり重きが置かれている。

個人情報保護や通信の自由という意味での「プライバシー権」も間違いなくとても保障されていないが、自分の情報と引き換えで得ている別の自由や利便性がある、という見方は中国国民の中では広く行き渡っており、その見方をしている人の方が多いために、日本や欧米で保障されることが望まれるプライバシー権を強く主張する人が少ないのだと考えることもできる。つまり、中国が「未成熟」なのではなく、必要とされていない権利が保障されていない、という風に捉えることができる側面もある。

また、ここでの「権力分立」はおそらく三権分立のことが指されているが、これに関しても、(三権分立という意味での) 権力分立が「未成熟」という道半ばであるかのような表現は西洋的な視点を採用した言い方であり、中国はそもそもその西洋的な考えを取り入れていない、すなわち三権分立をゴールとして考えていないという認識がなされていない。おそらく、この書き手は中国における中央政府の政党、国会、政府、裁判所の関係と、中央と地方の関係を図として頭の中で浮かべることができていないと考えられる。

なお、権力分立が地方分権のことを刺しているのであれば、中央に集中していた権力を地方に分散させよう、というアプローチは過去に取られている。ただ、それによって地域間格差が広がってしまったという見方や、中国は時期(数年、数十年スパン)によって権力の集中と分散を繰り返しており、今は中央集権モード、という見方もある。

中央の権力が明白に分立していないということは確かだが、そもそもなぜ分立があるべき姿なのか、すなわち、そもそもなぜ権力は分立させないといけないのかという、義務教育の社会の授業で学んだ常識を、中国は揺さぶる存在である。

「民族的統一性 (13億人の国を維持すること)」

・「民族」的統一性と「13 億人」の国を維持することがイコールとされているところが興味深い。

・習近平のスピーチなどから、現在中央政府が”Chinese Dream”という方向で全中国を統一しようとしているように感じるのは自然だが、民族を一つに統一しようと考えている、という解釈はできないのではないか。むしろ、戸口制で（いまだに人と土地をかなりちゃんと結びつけているし、チベット内モンゴルウイグル等は漢化政策！融合！というより、隔離、って感じだし、統一より区別をきちんとしているんじゃないかな。

「経済成長に伴う豊かになっていくことという高揚感」

豊かになるという希望や高揚感を「便益」と表現しているあたり、中国に住む人たちが何を求めているかの実感がないように感じる。

中国共産党の統治体制のもとで生じた便益の一つとして、（他の元共産党国が政権崩壊とともに経済面で苦しみ、リーマンショックで多くの国が不況に陥る中で）奇跡的な経済成長をしたことを挙げることは可能である。

だが、豊かになれる、という希望を持てることは確かに一見いいことのように見えるが、全国民が豊かな生活を夢見るとはいいことだと考えるのは、1 億人強しかいない国にいるがゆえのように感じる。中国については、13 億人全てが北京の富裕層の生活を夢見てしまったら、今後どれだけ不満が溜まっていくのだろうかという恐れの方が、先に考えてしまう。

「強い中国の実現に向けた高揚感」

まず、そもそも「強い中国」が何を指すか。アルマゲドンという 90 年代に作られたアメリカの映画があるが、あの映画で描かれているアメリカこそ日本とか欧米諸国が想像する「強い」国＝当時のアメリカを表現しており、映画にみなぎるエネルギーはまさしく高揚感と形容できる。だからこそアメリカをはじめ世界で莫大な興行収入を上げたのだろうが、あの映画の中国版を作ったとしても、すなわち中国が中国の税金を大量に使って地球の人々を救うために宇宙に国民を送り込むというストーリーの映画を作ったとしても、中国の人たちには響かないのではないか。

中国映画で有名なものとしてアフリカの内戦を舞台に大量の反乱軍を中国人三人だけで倒すというアクション映画「戦狼」という映画があると思うが、留学中に知り合った中国人の友人で映画の感想を聞いたところ、中国大使館が中国人を大量に保護したこ

とで中国人が生き延びられたというシーンがあったり、彼が映画館でそれを見に行った時は、上映の最後に中国のパスポートの写真が出てきて、「このパスポートを持っていれば世界のどこにいてもあなたの身は安全です」というキャプションが隣に流れたと説明された。強い中国、は他国との比較優位に立っているという点ではなく、国民全員に安全を提供してくれるような政府である、という点にフォーカスされているように感じた。

「これ以外に現中国の統治体制だから得られる便益に関して、何か伺ったりしてますか？」

・現在の統治の体制だからこそ、すなわち日本や欧米よりも手に入れられる便益は、体制だけが理由でないにせよ、あるように感じた。ただ、私は留学期間中、北京大学という最も今の体制によるあらゆる恩恵を享受してきた人たちが通う大学にて生活してきたため、どうしてもいい印象を多く受けてしまったように感じる。

まず一つ思いつくメリットは、政府の後押しがあればなんでもスピード早く実行できることがある。5G回線のための高速準備、AlipayやWechat pay等電子決済の圧倒的普及、スタートアップを簡単に始められるところなどにそれは現れている。

また、「中間層」とされる以上の人たちは、この体制下だからこそ得られる安心感があるように感じた。全てが管理されている、すなわちあらゆる行動（博物館のチケット購入、電車の切符購入など）を取る際に身分証の提示、もしくは身分証で買った電話番号があらゆるサービスを楽しむ際に必要であるため、悪事を行うことは日本よりも難しく、また、法に触れると徹底的に罰せられると分かっているからこそ、安心して暮らしている人は逆に多いのかもしれない。現に北京を真夜中に歩き回るのは、警察や監視カメラの量からして、東京を歩き回るより断然安全のように感じた。

また、「中間層」以下の人たちは明らかに日本のそれより生活が芳しくないが、逆に、これだけの経済格差があるのに、小規模のものはかなりあるにせよ、体制を揺るがすほどの暴動も起こらずやって来られたのはこの体制下だからこそそのように感じる。北京にいる清掃員や深夜の警備の人たちはほとんどが他の県から出稼ぎできており、学校の近くには乞食の方が数人おり、地方の方に行くと更に生活の質の低さは顕著だが、共産党を倒して新しい体制を作りたいとまで思うに至る勢力は、少なくとも都心部にはいないように感じた。「13億人の国を維持すること」は、少なくとも欧米的な民主主義、資本主義だけではかなり難しいように思う。

「中国共産党の統治の正当性」

・「正当性」という言葉を辞書で引くと「社会通念上また法律上、正しく道理にかなっていること」と出てくるが、国を統治する上で「道理にかなっている」と判断する主体は誰なのか。

法律上は国際法国内法共に中華人民共和国の存在を認めているため、「社会通念上」の話に限って行うとすると、この質問を送ってきた日本という中国からして海外に当たる人間が、正当性があるかを判断するのであれば、三権分立や自由選挙を善とする思想のもとに作られた憲法のもとに生きており、共産党の統治体制を「正当」と感じるのは難しいのかもしれない。

だが、中国での滞在を経て、外から見たそれらの物差しをもって国内における国家の正当性を測ることは、不可能のように感じた。三権が分立することも、選挙が行われることも求められていない。

その時代の感情で、国家が「良い」と判断することになるのか。留学中に10省分の10都市ほどを旅で訪れたが、中国の都市部ではプラスの空気が漂っていた。だが、新疆ウイグル自治区やチベットにおける騒動は授業でも何度も取り扱われていたし、香港からの留学生は「自分は中国人ではなく香港人だ」と主張していた。

そもそも日本より土着の民族がいくつもある、面積も数倍ある領土を統治する国家の正当性を、日本という国家と同じ単位で扱うことに違和感を覚えるようになった。アメリカやオーストラリアなどの、移民でできた国とも違う。強いていうならば、EUが最も似ているのかもしれない。そのEUが綻びを見せてきているのに対し、中国は今最盛期を迎えているように見える。だが、文化大革命や大飢饉、天安門事件が過去にあったこともまた事実である。

日本にいる時は授業の「ディスカッション」などで「正当性」などという言葉が適当に使っているのを目の当たりにしていたが、より一層そのような場所では過ごせなくなってしまったように感じる。

3 終わりに

今更になって「留学先でどのような授業の受講ができるのか、寮や大学の環境について等、報告書の提出をお願いいたします。」とメールの本文に書いてあることに気づいたため、最後に上記について記述する。

・授業について

人気が高い授業は履修登録の際に抽選が行われる。英語で行われる授業は少ないために人気なものも多く、中国語がとてもレベルが低い状態でこのプログラムでの留学を行うと、とても少ない授業しか履修できなくなってしまう可能性がある。現に私は授業を三つしか取ることができなかった。

そのため、どのような授業を受けることができるかより、授業外の時間をどう有効活用するかと考えるほうが留学の充実性に直結するのように感じる。私は京劇協会の人たちとの交流、一人旅（寝台列車を使えば運賃も宿泊費も浮く）、読書、散歩（歌っていると人が寄ってきて友達ができる）などを行っていた。

・寮や大学の環境について

北京大の寮と校内施設は、北京大生が学問に集中できるようあらゆる工夫がなされている。換言すると、大学の中だけで身体も心もとても心地よく快適に過ごさせてしまう。また、日本のあらゆる大学と比べて、北京大はとても大きい。そのため、小国日本からやって来た人間は、北京大の中にいるだけで中国に来た！という感覚を得てしまう。しかし、北京大は中国の中でも相当に偏ったところであるので、いかに外に出る時間を大事にするかは気にかけていた。

正直今は、半年間の留学体験は、あらゆる要素が混ざった混沌とした塊としてしか自分の中に存在しておらず、解体することが難しい。このレポートもフィクションは書きたくないが、忠実に書こうとすると筆が全く進まない。膨大な日記とメッセージのやりとりと旅の記録と授業のノートをいつか整理できればと思う。